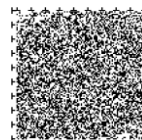


第 2 章 スポーツを取り巻く現状

- 1 社会情勢の変化
- 2 国や都の動向からみる社会潮流
- 3 市を取り巻く現況及び市の特徴
- 4 市のスポーツ推進の現状
- 5 計画策定の視点



1 社会情勢の変化

(1) 人生 100 年時代の到来

日本人の健康寿命は世界最高水準であり、更なる延伸が予想されています。こうした背景を受け、政府は「人生 100 年時代構想会議⁷」を立ち上げ、幼少期から高齢者まで全ての人が元気に活躍し続けることができる社会の実現を目指しています。人生 100 年時代の基盤は、一人一人の心身の健康であり、スポーツは市民の健康づくりや仲間づくりに寄与する活動として期待できます。

(2) 持続可能な社会への移行

SDGs（持続可能な開発目標）とは、平成 27（2015）年 9 月の国連サミットで採択された令和 12（2030）年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための 17 のゴール（目標）から構成されており、スポーツは健康、教育、コミュニティ強化などに寄与するものとして期待されています。

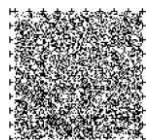


図表 6 SDGs ロゴおよびアイコン

(3) 多様性を認め合うまちの実現

「共生社会」とは、これまで必ずしも十分に社会参加できる環境のなかった障害のある方をはじめ、配慮が必要な人々が積極的に参加・貢献していくことができる社会であるとともに、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会であり、国は、このような社会を目指すことを積極的に取り組むべき重要な課題ととらえています。

⁷ 人生 100 年時代を見据えた経済社会システムを創り上げるための政策のグランドデザインを検討する会議。平成 29 年 9 月に設置され、9 回にわたって議論が行われた。



スポーツには、ジェンダー平等⁸をはじめとする幅広い社会課題の解決に寄与する力があると期待されています。一方で、我が国における各種競技団体の役員の女性参加は世界各国と比べると遅れており、東京 2020 大会の開催を通じて、ジェンダー平等に対する国民の関心が高まりました。

これからは、スポーツに親しむ場においても、性別、年齢、障害の有無、国籍等にかかわらず、多様性を尊重し合うことが重要です。

（４）国際スポーツ大会のレガシー

令和元（2019）年にはラグビーワールドカップ 2019 が開催され、開幕前の予想を大きく上回る盛り上がりを見せました。また、東京 2020 大会は新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、開催が 1 年延期となりましたが、安全・安心に大会が開催されました。

このような国際スポーツ大会を契機に実施したパブリックビューイングやホストタウン交流⁹、スポーツに対する機運の高まりなど、レガシーを生かした取組が求められます。

（５）デジタル技術革新の進展

現在、ICT¹⁰、AI¹¹（人工知能）、VR¹²（仮想現実）・AR¹³（拡張現実）などの技術開発が急速に進展しています。これらの技術は、新しい産業の創出・発展や企業の生産性向上のみならず、人々の働き方やライフスタイル、健康管理、教育など、市民の生活に関わるあらゆる分野での活用が期待されます。スポーツ分野においても、個人・法人を問わないトレーニング動画のオンライン配信や、VR・ARを活用した新たなスポーツなど、多様な楽しみ方の創出が期待できます。

8 ひとりひとりの人間が、性別にかかわらず、平等に責任や権利や機会を分かちあい、あらゆる物事を一緒に決めることができること。

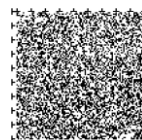
9 ホストタウンとは、東京 2020 大会に向けて、地域の活性化や観光振興などの観点から、参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図る地方公共団体を国が登録する制度。ホストタウンとして登録された自治体は、住民と来日した選手らがスポーツ・文化などの様々な事業を通じて交流を行っている。調布市は、サウジアラビア王国のホストタウンとして、2016 年 1 月 26 日に登録された。

10 Information and Communication Technology の略。情報や通信に関する技術の総称。

11 Artificial Intelligence の（人工知能）略称。人間の思考プロセスと同じような形で動作するプログラム、あるいは人間が知的と感じる情報処理・技術といった広い概念で理解されている。

12 Virtual Reality の略で、コンピュータによって創り出された仮想的な空間などを現実であるかのように疑似体験できる技術。仮想現実。主に VR ヘッドセットを装着することで視覚的に現実世界を遮断し、デジタル上に再現された仮想空間をまるでその場にいるように体感できる技術を指す。

13 Augmented Reality の略で、現実世界にデジタル情報を付加する技術。拡張現実。主にスマートフォンやスマートグラスを通し、目で見ていた光景に CG 映像などが合成されあたかも実存するように見える技術を指す。



2 国や都の動向からみる社会潮流

(1) 国の潮流

第1期計画が策定された平成24（2012）年度以降、スポーツ庁の新設と、それに伴う障害者スポーツの厚生労働省からの移管、第2期スポーツ基本計画の策定など、新たなスポーツ政策が次々に展開されてきました。また、第2期計画が策定された平成29（2017）年度以降も、ラグビーワールドカップ2019や東京2020大会等の国際的なスポーツ大会の開催、日本体育協会から日本スポーツ協会への名称変更など、スポーツに対する機運の醸成やパラダイムシフト（認識の変化）が生じています。また、新型コロナウイルス感染症の拡大は、心身の健康づくりや人と人とのつながりの重要性を改めて認識するきっかけとなりました。

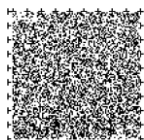
このような社会情勢の変化を受けて、スポーツを推進する意義や目的は、従来から認識されてきた心身の健康づくりや人格形成、競技力向上という枠を超え、人々の暮らしをより豊かにするもの、地域コミュニティの形成や共生社会を育むこと、地域経済の活性化に寄与するものとして考えられるようになってきています。そのため、スポーツは個人と地域のどちらの視点においても、ますます欠かせない存在となっています。

このように、東京2020大会の基本コンセプトの一つとなった多様性と調和や、共生社会への関心が一層広まる中、令和3（2021）年度に策定された第3期スポーツ基本計画では、スポーツを「する」「みる」「ささえる」ことを真に実現できる社会を目指すため、次の3つの視点が必要になるとされています。

- ① 社会の変化や状況に応じて、既存の仕組みにとらわれずに柔軟に対応するというスポーツを『つくる／はぐくむ』という視点
- ② 様々な立場・背景・特性を有した人・組織が『あつまり』、『ともに』活動し、『つながり』を感じながらスポーツに取り組める社会の実現を目指すという視点
- ③ 性別、年齢、障害の有無、経済的事情、地域事情等にかかわらず、全ての人がスポーツにアクセスできるような社会の実現・機運の醸成を目指すという視点

図表7 第3期スポーツ基本計画における新たな視点

変化・充実しつつあるスポーツの意義を踏まえつつ、持続可能な社会の実現を目指すべく、社会情勢の変化を的確に捉え、スポーツを推進していくことが求められています。



第2期計画期間中の総括：

新型コロナウイルス感染症	▶ 感染拡大により、スポーツ活動が制限
東京オリンピック・パラリンピック競技大会	▶ 1年延期後、原則無観客の中で開催
その他社会状況の変化	▶ 人口減少・高齢化の進行 ▶ 地域間格差の広がり ▶ DXなど急速な技術革新 ▶ ライフスタイルの変化 ▶ 持続可能な社会や共生社会への移行

こうした出来事等を通じて、改めて確認された

- ・ 「楽しさ」「喜び」「自発性」に基づき行われる本質的な『スポーツそのものが有する価値』（Well-being）
- ・ スポーツを通じた地域活性化、健康増進による健康長寿社会の実現、経済発展、国際理解の促進など『スポーツが社会活性化等に寄与する価値』

を更に高める

第3期計画：新たな3つの視点

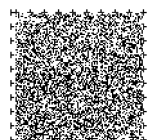
スポーツを「つくる/はぐくむ」
スポーツで「あつまり、ともに、つながる」
スポーツに「誰もがアクセスできる」

第3期計画：総合的かつ計画的に取り組む12の施策

- ① 多様な主体におけるスポーツの機会創出
- ② スポーツ界におけるDXの推進
- ③ 国際競技力の向上
- ④ スポーツの国際交流・協力
- ⑤ スポーツによる健康増進
- ⑥ スポーツの成長産業化
- ⑦ スポーツによる地方創生、まちづくり
- ⑧ スポーツを通じた共生社会の実現
- ⑨ スポーツ団体のガバナンス改革・経営力強化
- ⑩ スポーツ推進のためのハード、ソフト、人材
- ⑪ スポーツを実施する者の安全・安心の確保
- ⑫ スポーツ・インテグリティ¹⁴(高潔性)の確保

図表 8 第3期スポーツ基本計画の概要

14 高潔さ・品位・完全な状態を意味する言葉。スポーツにおける「インテグリティ」とは、「スポーツが様々な脅威により欠けるところなく、価値ある高潔な状態」を指す。



(2) 都の潮流

スポーツを通じて東京の未来を創造していくための羅針盤として「東京都スポーツ推進総合計画」が平成 30（2018）年 3 月に策定され、「スポーツの力で東京の未来を創る」の基本理念と、以下 3 つの政策目標が掲げられています。

また、東京 2020 大会を通じて人々のスポーツに対する関心が高まったこの機会を捉え、スポーツを東京に一層根づかせるため、「T O K Y O スポーツレガシービジョン」が令和 4（2022）年 1 月に公表されました。この中では、味の素スタジアムや武蔵野の森総合スポーツプラザなど都立スポーツ施設の活用が示されており、令和 5（2023）年 3 月にはパラスポーツの競技力向上の拠点及び障害のある人もない人もパラスポーツに親しむことのできる普及振興の場として「東京都パラスポーツトレーニングセンター」が味の素スタジアム内に開所されました。

令和 7（2025）年には、「世界陸上競技選手権大会」及び「デフリンピック」といった国際スポーツ大会が東京で開催されます。東京 2020 大会のレガシーを引き継ぎ、新しいフィールドを広げるべく、両大会を通じ、スポーツの力によって東京の未来を創るため、令和 5（2023）年 2 月に「ビジョン 2025」が策定されました。「ビジョン 2025」では、“みんながつながる”，“世界の人々が出会う”，“子どもたちが夢をみる”，“未来へつなぐ”，“みんなで創る”の 5 つの柱と、基本的な方針として「スポーツで新しいフィールドを広げ， 全ての人が輝くインクルーシブ¹⁵な街・東京へ」を掲げています。

スポーツ推進総合計画：

健康寿命の達成

共生社会の実現

地域・経済の活性化

T O K Y O スポーツレガシービジョン：

▶ 都立スポーツ施設の戦略的活用

【市内立地施設の位置づけ】

武蔵野の森 総合スポーツプラザ

多摩のスポーツ拠点としての更なる活用
(大規模大会誘致，大会レガシーの活用など)
エンタメなど多様な利用の促進
(コンサート，ダンス競技大会など)

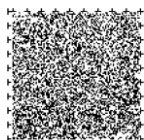
味の素 スタジアム

スポーツとエンターテインメントによる更なる活用促進
(サッカーと音楽イベントの同時開催など)
地域と連携した施策の展開
(周辺施設と連携したウォーキングイベントなど)

- ▶ 国際スポーツ大会の誘致・開催
- ▶ スポーツの場を東京の至る所に拡大
- ▶ パラスポーツの振興
- ▶ 東京のアスリートの活躍
- ▶ ボランティア文化の定着
- ▶ 未来へのメッセージ

図表 9 東京都のスポーツ関連計画

15 「すべてを包括する，包みこむ」こと。障がいの有無や国籍，年齢，性別などに関係なく，違いを認め合い，共生していくことを目指す社会をインクルーシブ社会という。



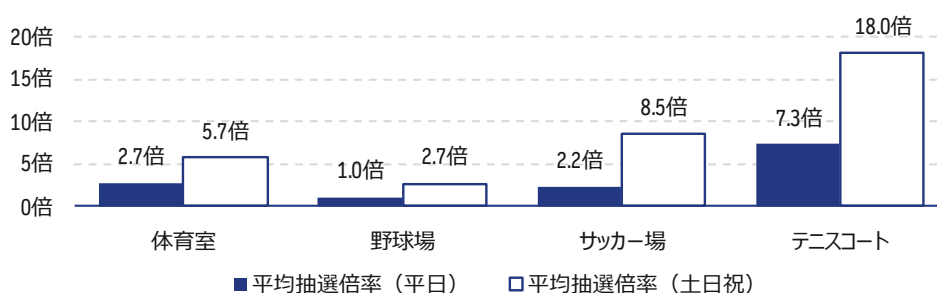
3 市を取り巻く現況及び市の特徴

(1) スポーツをする場

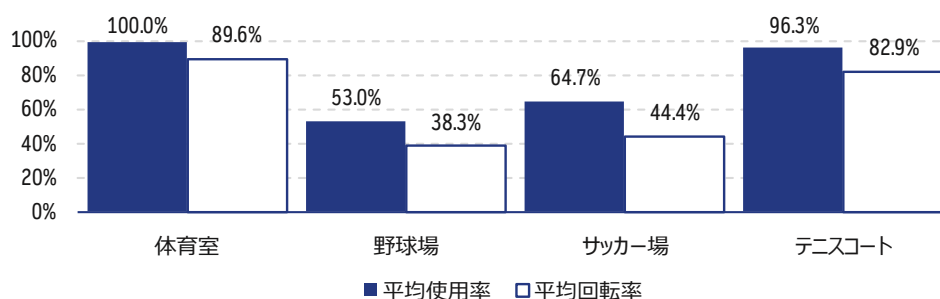
ア 公共スポーツ施設

市内には、屋内・屋外の様々な公共スポーツ施設があります。また、市の西部には、都立施設である味の素スタジアムや武蔵野の森総合スポーツプラザなどがあり、多摩地域の一大スポーツ拠点となっています。

市立スポーツ施設の室場別平均抽選倍率は、土日祝日が高く、特にテニスコートの倍率が高い傾向にあります。また、使用率は、体育室やテニスコートが高い傾向となっています。

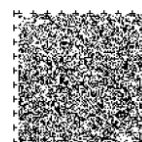


図表 10 主な市立スポーツ施設の室場別抽選倍率（令和4年度）



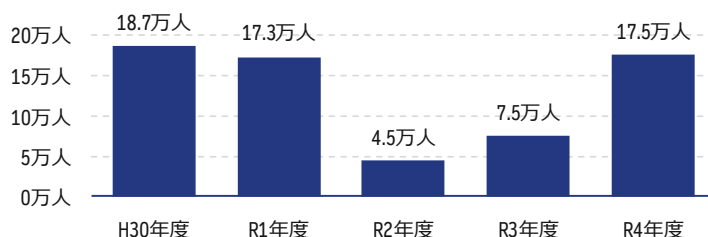
図表 11 主な市立スポーツ施設の室場別稼働率（令和4年度）¹⁶

¹⁶ 使用率は、使用日数÷使用可能日数で計算、回転率は、使用回数÷使用可能回数で計算。



イ 学校施設

市は、社会教育及び社会体育の振興、普及を進めながら健康の増進を図ることを目的に、学校施設の開放を行っています。



図表 12 学校施設開放延べ利用者数の推移（体育館及び校庭）¹⁷

（２）スポーツを支える担い手

ア スポーツ推進委員

調布市スポーツ推進委員は、地域のスポーツ推進を担う非常勤の公務員であり、住民に対するスポーツの実技の指導や助言を行うだけでなく、スポーツ推進のための事業実施に係る連絡調整やスポーツ推進のために必要な指導・助言を行う、地域スポーツ振興のコーディネーターとも言える存在です。

調布市スポーツ推進委員会は、現在、小学校区から 20 人、調布市レクリエーション研究会から 1 人の計 21 人で構成されており、市のスポーツ事業への協力だけでなく、地域住民と連携し、地域に根差したスポーツ・レクリエーション振興事業を展開しており、市のスポーツ行政の推進者として重要な役割を担っています。

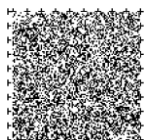
イ 調布市スポーツ協会

公益社団法人調布市スポーツ協会は、調布市における体育・スポーツの振興を目的とした、各種イベント・大会、教室など、地域スポーツの場や機会の提供、パラスポーツの普及啓発、スポーツ指導者やスポーツボランティアの養成と活用、また指定管理者として総合体育館の管理・運営などを行っています。

平成 4 年に前身の「社団法人調布市体育協会」が設立され、平成 24 年に公益認定を受け、公益社団法人へ移行、令和 5 年に「調布市体育協会」から「調布市スポーツ協会」に名称変更しました。

現在、同協会には競技団体 33 団体、さらに各競技団体に計 438 団体が加盟し、会員数は計 9,900 人（令和 6 年 3 月現在）となっています。

¹⁷ 1000 人未満は四捨五入処理。



ウ 総合型地域スポーツクラブ

総合型地域スポーツクラブは、多種目、多世代、自主運営を特徴とした地域住民による自主的・主体的に運営されるスポーツクラブです。

市内唯一の総合型地域スポーツクラブである「調和SHC倶楽部」は、だれもが、いつでも、どこでも気軽にスポーツを楽しみ、また健康な体力づくりや、文化的な趣味を増やしながら地域の一人一人の力によって創り上げる総合型地域スポーツ・文化クラブとして、平成 14（2002）年9月に設立されました。平成 15 年には「特定非営利活動法人（NPO）」認証を受け、子どもからお年寄りまで、みんなの笑顔が広がる魅力あるクラブを目指して活動を展開しています。

エ スポーツボランティア

平成 25（2013）年度のスポーツ祭東京 2013（第 68 回国民体育大会・第 13 回全国障害者スポーツ大会）を契機として、調布市スポーツ協会が「調布市スポーツボランティア」を立ち上げ、スポーツを「ささえる」人材の育成、活動の普及を目指し、市内で開催される市民スポーツまつりや市民駅伝競走大会などのスポーツイベント等での活動機会の提供を行っています。

令和 5（2023）年度には、ボランティア制度をリニューアルするとともに、THE ROAD RACE TOKYO TAMA 2023¹⁸（多摩地域で開催された自転車ロードレース（主催：GRAND CYCLE TOKYO 実行委員会、共催：東京都））におけるボランティア募集を契機として登録者も増加しており、より多くの方がボランティア活動に関われるよう、支援しています。

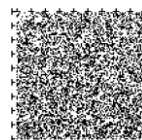
コラム：東京 2020 大会に向けた「調布市おもてなしボランティア」

東京 2020 大会では、組織委員会が運営主体となる大会ボランティアと東京都が運営主体となる都市ボランティアがありました。市は、両者が運営主体となるボランティアとは別に、市独自の「調布市おもてなしボランティア」を募集し、延べ約 400 人から応募がありました。おもてなしボランティアは、ラグビーワールドカップ 2019 期間中ファンゾーン周辺での取組など、大会を契機とした様々な場面で活動しました。新型コロナウイルス感染症の影響により、東京 2020 大会本番での活動は中止となりましたが、ラグビーワールドカップ 2019 等での活動の経験を生かし、スポーツボランティアを含め、地域のボランティア活動の継続に向けた支援を行いました。



ラグビーワールドカップ 2019
での活動の様子(通訳補助)

18 2023 年 12 月 3 日に開催された東京都主催の自転車ロードレース大会。八王子市の富士森公園をスタートし、武蔵野の森公園前スタジアム通り（調布市）をゴールとするコースが設定された。また、パラサイクリングでは、武蔵野の森公園周辺に周回コースが設けられた。



(3) スポーツによるにぎわいの創出

ア トップスポーツチーム等との連携

ＦＣ東京や東芝ブレイブルーパス東京、東京サントリーサンゴリアス、読売巨人軍、ＮＴＴ東日本バドミントン部など、トップスポーツチーム等と連携を図りながら、「する」「みる」「ささえる」の視点に基づいた、市民がスポーツに親しめる機会の充実や環境づくりを推進しています。



図表 13 市ゆかりのトップスポーツチーム等

イ 多摩地域の一大スポーツ拠点

市の西部には、味の素スタジアムや武蔵野の森総合スポーツプラザ、調布基地跡地運動広場があり、多摩地域の一大スポーツ拠点を形成し、多摩地域のスポーツ振興に寄与しています。また、当該エリアは競技大会や地域スポーツの拠点、大規模イベントの会場として、地域の活性化やスポーツを通じたまちづくりの中核を担っています。



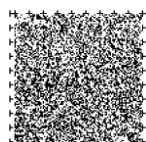
(左：味の素スタジアム，中：武蔵野の森総合スポーツプラザ，右：調布基地跡地運動広場)

図表 14 多摩地域の一大スポーツ拠点

ウ 大型スポーツイベントの開催

令和元（2019）年のラグビーワールドカップ 2019 では、東京スタジアム（味の素スタジアム）で開会式、開幕戦を含む 8 試合が行われ、約 38 万人が来場しました。また、調布駅前広場周辺で開催されたファンゾーン（東京都主催）には、16 日間で延べ 13 万人が訪れました。大会を契機として、ラグビーを通じたスポーツ振興をはじめ、地域経済の活性化、青少年の健全育成等の多岐にわたる分野において実践した取組を後世に残すべく、令和 3（2021）年 4 月に東芝ブレイブルーパス（現：東芝ブレイブルーパス東京）、サントリーサンゴリアス（現：東京サントリーサンゴリアス）、調布市、府中市、三鷹市の 5 者による連携協定を締結し、地域一体となってラグビー競技の普及に取り組んでいます。

1 年延期となった東京 2020 大会では、市内の 3 つの競技会場（東京スタジアム（味



の素スタジアム），武蔵野の森総合スポーツプラザ¹⁹，都立武蔵野の森公園）において，6競技が開催され，その後，これらの競技会場を含むエリアについては，大会開催を象徴する場所として「武蔵野の森オリンピック・パラリンピックパーク²⁰」と名付けられ，大会の感動と記憶を後世に永く伝えられることになりました。大会を契機とした有形・無形のレガシー創出のため，これまで展開してきたソフト・ハード両面にわたる取組については，一過性のものとせず，大会のレガシーとして継承・発展させていく必要があります。

今後も，市内で開催される国際的・全国的なスポーツ大会や，トップスポーツチームの試合を契機とした市民スポーツの振興はもとより，スポーツによるまちのにぎわい創出を図っていきます。

<味の素スタジアム>

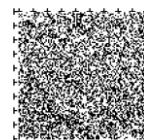
年	イベント
2002	F I F Aワールドカップ 2002（サッカー） ※サウジアラビア王国公認キャンプ地
2003	アテネオリンピック・アジア2次予選（サッカー）
2004	U-23 国際親善試合（サッカー）
2010	東アジアサッカー選手権 2010 決勝大会
2012	AFC チャンピオンズリーグ 2012（サッカー）
2013	第 97 回日本陸上競技選手権大会 （兼 2013 年世界陸上競技選手権大会モスクワ大会日本代表 選考会）
2013	スポーツ祭東京 2013
2016	第 95 回天皇杯全日本サッカー選手権大会決勝
2016	リポビタンD チャレンジカップ 2016（ラグビー）
2016	AFC チャンピオンズリーグ 2016（サッカー）
2017	キリンチャレンジカップ 2017（サッカー）
2017	リポビタンD チャレンジカップ 2017（ラグビー）
2017	E A F F E-1 サッカー選手権 2017 決勝大会
2018	リポビタンD チャレンジカップ 2018（ラグビー）
2019	ラグビーワールドカップ 2019 日本大会
2020	AFC チャンピオンズリーグ 2020（サッカー）
2021	S A I S O N C A R D C U P 2021（サッカー（U-24））
2021	東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会

図表 15 過去に味の素スタジアム（東京スタジアム）で開催された主な国際・国内スポーツ大会²¹

19 武蔵野の森総合スポーツプラザは平成 29（2017）年開場。

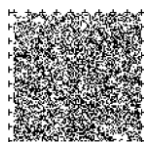
20 競技会場等となった施設と公園を一体的なエリアと捉え，東京 2020 大会の開催を象徴する 2 つのエリアに「オリンピック・パラリンピックパーク」の名称がレガシーとして付与されている。（武蔵野の森公園，武蔵野の森総合スポーツプラザ，東京スタジアムを含むエリア：「武蔵野の森オリンピック・パラリンピックパーク」，有明親水海浜公園，有明アーバンスポーツパーク，有明アリーナ，有明体操競技場を含むエリア：「有明オリンピック・パラリンピックパーク」）

21 その他，通年でサッカーJリーグやラグビーリーグワンの試合が開催されている。



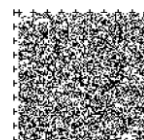
<武蔵野の森総合スポーツプラザ>

年	イベント
2017	全日本フィギュアスケート選手権大会
2018	天皇杯第 46 回日本車いすバスケットボール選手権大会
2018	三菱電機 WORLD CHALLENGE CUP2018 (車いすバスケットボール)
2018	ダイハツ・ヨネックスジャパンオープン 2018 (バドミントン)
2018	楽天・ジャパン・オープン・テニスチャンピオンシップス 2018
2018	極真会館 第 50 回オープントーナメント 全日本空手道選手権大会
2018	第 18 回全日本チアダンス選手権大会
2018	平成 30 年度 天皇杯・皇后杯 全日本バレーボール選手権大会
2018	SoftBank ウインターカップ 2018 第 71 回全国高等学校バスケットボール選手権大会
2019	第 32 回都道府県対抗ジュニアバスケットボール大会 2019
2019	2019 体操ワールドカップ東京大会
2019	FIVB バレーボールネーションズリーグ 2019 男子東京大会
2019	UIPM2019 近代五種ワールドカップファイナル東京大会
2019	ダイハツ・ヨネックスジャパンオープン 2019 バドミントン選手権大会
2019	三菱電機 WORLD CHALLENGE CUP2019 (車いすバスケットボール)
2019	春の高校バレー 第 71 回全日本バレーボール高等学校選手権大会
2019	V.LEAGUE FINAL (バレーボール)
2019	第 58 回 NHK 杯体 第 49 回世界体操競技選手権大会日本代表決定競技会
2019	天皇杯第 47 回日本車いすバスケットボール選手権大会
2019	第 37 回全日本バウンドテニス選手権大会
2019	内閣総理大臣杯 第 62 回全国空手道選手権大会
2019	第 12 回オープントーナメント全世界空手道選手権大会
2019	第 19 回全日本チアダンス選手権大会
2019	SoftBank ウインターカップ 2019 第 72 回全国高等学校バスケットボール選手権大会
2020	春の高校バレー 第 72 回全日本バレーボール高等学校選手権大会
2020	第 52 回全日本・2020 全日本女子大会 (極真空手)
2020	令和 2 年度天皇杯・皇后杯全日本バレーボール選手権大会
2020	SoftBank ウインターカップ 202 令和 2 年度 第 73 回 全国高等学校バスケットボール選手権大会
2020	第 18 回全日本学生チアダンス選手権大会
2020	第 20 回全日本チアダンス選手権大会
2021	東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会
2021	ジュニアウインターカップ 2020-2021 第 1 回全国 U15 バスケットボール選手権大会
2021	第 19 回全日本学生チアダンス選手権大会
2021	第 21 回全日本チアダンス選手権大会
2021	内閣総理大臣杯・文部科学大臣杯争奪 令和 3 年度第 75 回全日本総合バドミントン選手権大会
2022	ジュニアウインターカップ 2021-2022 第 2 回全国 U15 バスケットボール選手権大会
2022	第 46 回 日本ハンドボールリーグ プレーオフ
2022	内閣総理大臣杯 第 64 回全国空手道選手権大会
2022	第 22 回 全日本少年少女空手道選手権大会
2022	令和 4 年度天皇杯・皇后杯全日本バレーボール選手権大会
2022	2022 ジャパンオープンチアアリーディング選手権大会



年	イベント
2022	2022 日本学生チアリーディング選手権大会
2022	公益財団法人日本バドミントン協会創立 75 周年記念事業 令和 4 年度第 76 回全日本総合バドミントン選手権大会
2023	ジュニアウインターカップ 2022-2023 第 3 回全国 U15 バスケットボール選手権大会
2023	第 2 回 全日本青少年フルコンタクト空手道選手権大会
2023	第 47 回 日本ハンドボールリーグ プレーオフ
2023	W リーグプレーオフセミファイナル・ファイナル
2023	内閣総理大臣杯 第 65 回全国空手道選手権大会
2023	JFA バーモントカップ 第 33 回全日本 U-12 フットサル選手権大会
2023	第 28 回全国私立高等学校選抜バドミントン大会
2023	第 76 回全日本新体操選手権大会
2023	令和 5 年度天皇杯・皇后杯全日本バレーボール選手権大会
2023	SoftBank ウインターカップ 202 第 76 回全国高等学校バスケットボール選手権大会
2023	内閣総理大臣杯・文部科学大臣杯争奪 令和 5 年度第 77 回全日本総合バドミントン選手権大会
2024	京王 Jr.ウインターカップ 2023 -2024 第 4 回全国 U15 バスケットボール選手権大会
2024	JOC ジュニアオリンピックカップ大会/ 第 10 回 全日本中学校チアリーディング選手権大会
2024	JOC ジュニアオリンピックカップ大会/ 第 34 回 全日本高等学校チアリーディング選手権大会

図表 16 過去に武蔵野の森総合スポーツプラザで開催された主な国際・国内スポーツ大会



エ スポーツを通じた共生社会の充実

東京 2020 パラリンピックを契機として、「パラハートちょうふ つなげよう、ひろげよう、共に生きるまち」のキャッチフレーズを掲げ、子どもたちへのパラリンピック教育の実施や、パラスポーツに親しむ機会の創出、「調布市障害者スポーツの振興における協議体」における当事者の運動機会の創出に向けた取組など、共生社会の充実に向けて取り組んでいます。

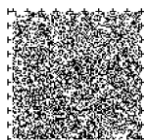


つなげよう、ひろげよう、
共に生きるまち

図表 17 パラハートちょうふロゴ

オ 市をあげてスポーツを応援する土壌

調布市応援アスリートとして令和6（2024）年3月現在、15 人のアスリートを認定し、市をあげて応援することで、アスリートの更なる飛躍を期待するとともに、市民のスポーツへの関心を高め、スポーツ振興へとつなげています。



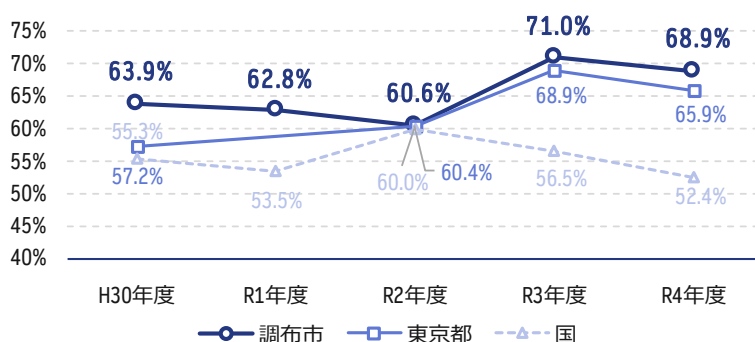
4 市のスポーツ推進の現状

令和4（2022）年度に実施した「調布市民のスポーツ活動に関する実態調査²²」の結果等を踏まえ、市のスポーツ推進の現状を整理します。

（1）「する」スポーツについて

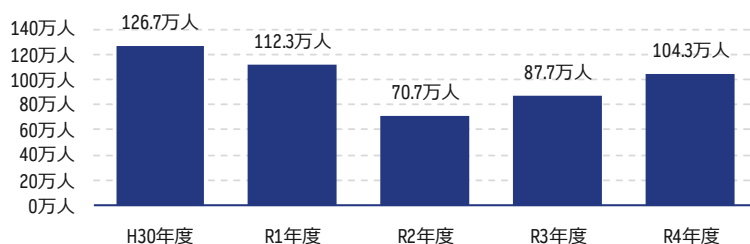
週に1回以上スポーツをする市民の割合（スポーツ実施率）は、平成30（2018）年度には63.9%でしたが、新型コロナウイルス感染症が感染拡大した令和2（2020）年度には60.6%に低下したものの、その後は回復し、コロナ禍前よりも高い水準となっています。

一方、市立スポーツ施設の利用者数について、平成30（2018）年度は120万人を超える状況でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、令和2（2020）年度は約70万人に減少しました。その後、利用者数は徐々に回復しつつあり、令和4（2022）年度には約104.3万人となっています。



図表 18 週1回以上スポーツをする人の割合の推移（国・都比較）

出典：調布市市民意識調査（調布市）²³/都民のスポーツ活動に関する実態調査（東京都）/
スポーツの実施状況等に関する世論調査（スポーツ庁）



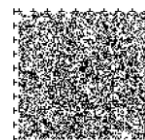
図表 19 市スポーツ施設利用者数（学校施設開放含む）の推移

22 市民のスポーツ活動に関するニーズや実態を把握するとともに、市のスポーツ振興事業を推進していくための基礎資料とするために実施した調査。

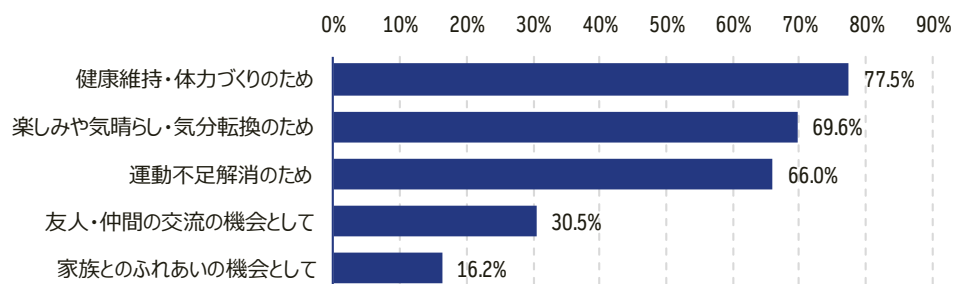
実施時期：令和4年12月5日(月)～令和5年1月10日(火)

対象：無作為抽出による16歳以上の市民約3,000人

23 経年での推移を把握するため、令和4年度に実施した「調布市民のスポーツ活動に関する実態調査」での数値ではなく、毎年実施している「調布市民意識調査」の数値を活用

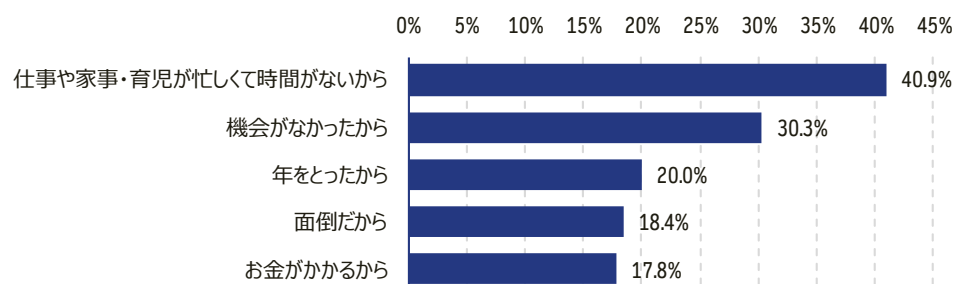


スポーツを実施した理由として、「健康維持・体力づくりのため」が 77.5%、「楽しみや気晴らし・気分転換のため」が 69.6%となっています。一方、スポーツを実施しなかった理由は、「仕事や家事・育児が忙しくて時間がないから」が 40.9%、「機会がなかったから」が 30.3%となっています。



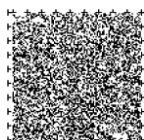
図表 20 スポーツの実施理由上位 5 項目 (n=794)

出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）

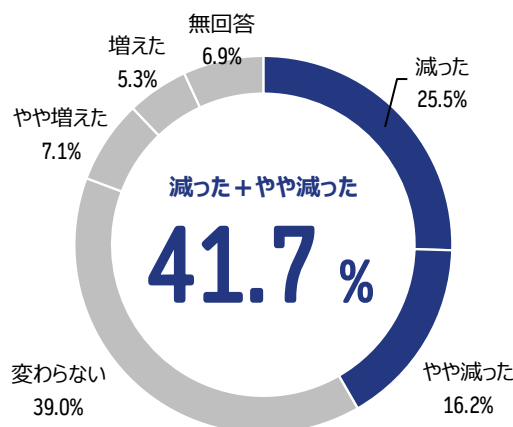


図表 21 スポーツを実施しなかった理由上位 5 項目 (n=320)

出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）



また、新型コロナウイルス感染症の影響により、運動・スポーツをする回数が「減った・やや減った」人が41.7%（「減った」が25.5%、「やや減った」が16.2%）となっています。

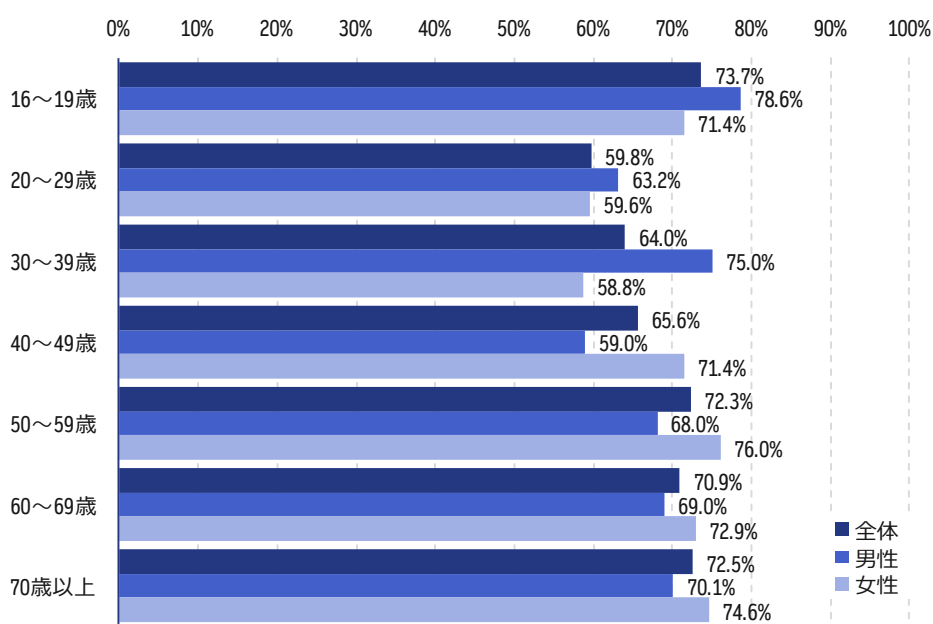


図表 22 新型コロナウイルス感染症の影響によるスポーツ実施頻度の変化（n=1,178）

出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）

年代別では、週1回以上スポーツを実施している人の割合は、10歳代が73.7%と比較的高い割合となっているものの、20歳代から40歳代が相対的に低い傾向にあります。一方、20歳代以降は年代を重ねるごとにスポーツを実施している人の割合が増え、50歳代以降は70%を超える状況となっています。

また、30歳代までは男性のほうが実施率の高い傾向が続きますが、40歳代で逆転し、以降は女性のほうが高い実施率となります。



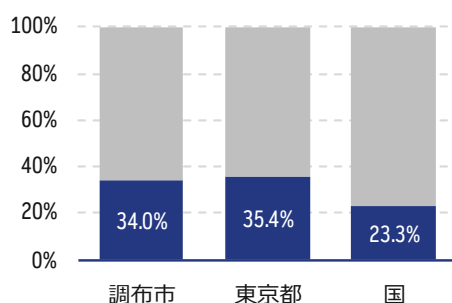
図表 23 （性・年代別）週1回以上スポーツを実施している人の割合（n=1,181）

出典：調布市民意識調査（調布市）結果より作成



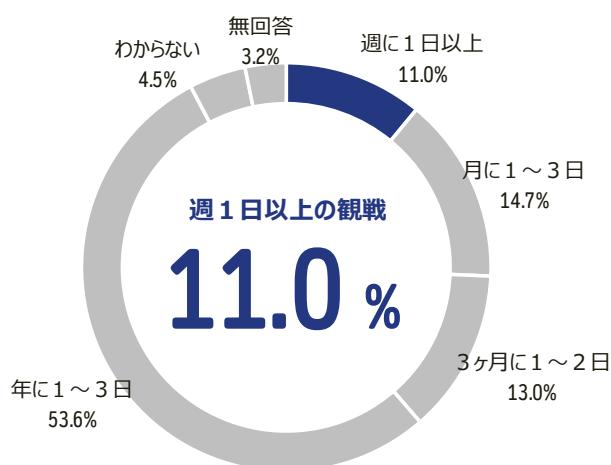
(2) 「みる」スポーツについて

1年間で現地でスポーツを観戦したことがある人は34.0%（「なし・わからない」と「無回答」を除いた割合）であり、国や都と比較すると、35.4%の東京都とほぼ同じ割合となっています。



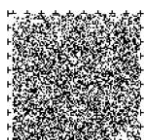
図表 24 この1年間の現地でスポーツ観戦有無
出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）/
都民のスポーツ活動に関する実態調査（東京都）24/
スポーツの実施状況等に関する世論調査（スポーツ庁）25

スポーツを観戦した人のうち週に1日以上スポーツ観戦をした人は11.0%（「週に2日」が4.7%、「週に1日」が3.0%など）となっています。

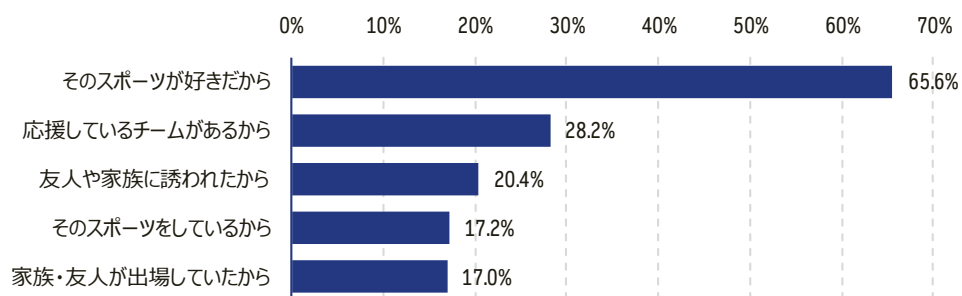


図表 25 この1年間のスポーツ観戦頻度（n=401）
出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）

- 24 都民のスポーツ活動に関する実態調査（令和4年10月）『問5 あなたは、この1年間にスタジアム・体育館・沿道などで実際にスポーツを観戦したことがありますか。観戦したスポーツをお選びください。』における「観戦しなかった」61.5%、「わからない」0.7%以外（「無回答」2.5%も除く）。端数処理の関係で合計しても100%にならない。
- 25 スポーツの実施状況等に関する世論調査（令和4年12月調査）『Q35 あなたは、この1年間にどんなスポーツを観戦しましたか。』における「直接現地で」、「28 みななかった」76.7%以外。

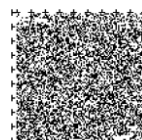


スポーツを観戦した理由は、「そのスポーツが好きだから」が 65.6%、「応援しているチームがあるから」が 28.2%となっています。



図表 26 スポーツ観戦の理由上位 5 項目 (n=401)

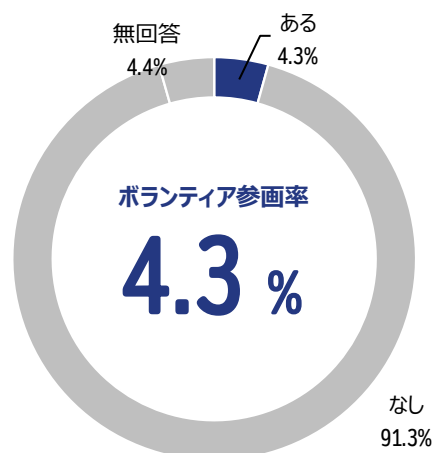
出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）



(3) 「ささえる」スポーツについて

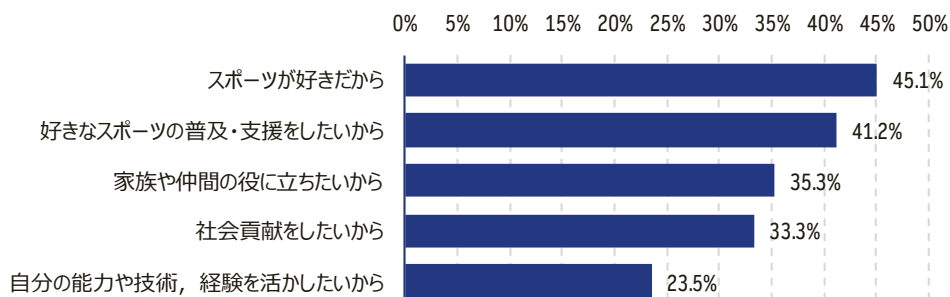
この1年間でボランティアを行った人は4.3%であり、ボランティアを行ったことがない人は91.3%となっています。

ボランティアを行った理由として、「スポーツが好きだから」が45.1%、「好きなスポーツの普及・支援をしたいから」が41.2%となっています。



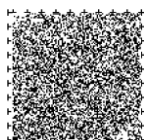
図表 27 この1年間のボランティア活動の有無(n=1,178)

出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）

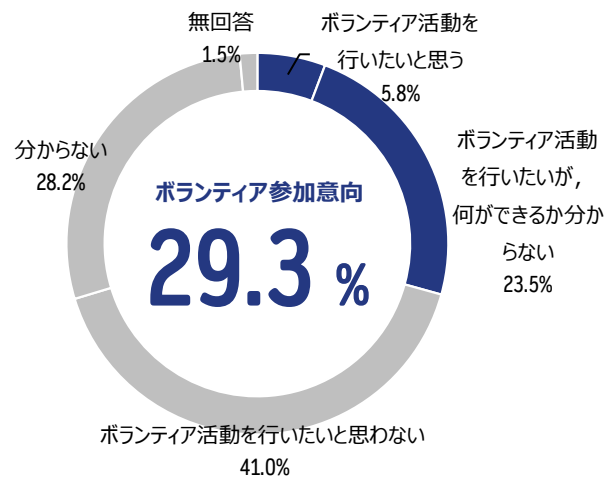


図表 28 スポーツボランティア参画の理由上位5項目 (n=51)

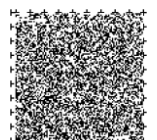
出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）



今後のボランティア活動への参加意向は、意向ありが 29.3%（「ボランティアを
 行いたいと思う」が 5.8%「ボランティア活動を行いたい、何が
 できるか分からない」が 23.5%）、「ボランティア活動を行いた
 いと思わない」が 41.0%となっています。

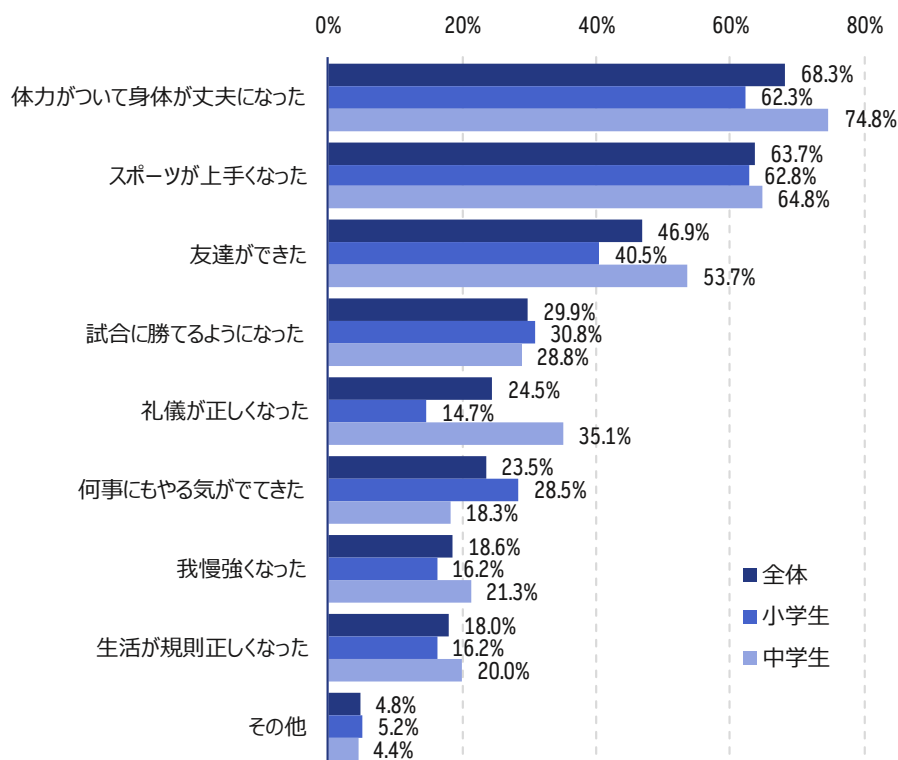


図表 29 今後のボランティア参加意向(n=1,175)
 出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）



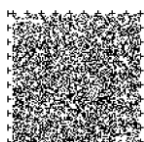
(4) 子どものスポーツについて

普段、体育の授業以外で週1回以上運動・スポーツを実施する子どもは 84.8%（小学生 89.3%，中学生 80.6%）となっています。運動・スポーツをやったことは「体力がついて身体が丈夫になった」が 68.3%，「スポーツが上手になった」が 63.7%となっています。小学生，中学生とも上位2項目は同じですが，中学生では「体力がついて身体が丈夫になった」が多くなっています。

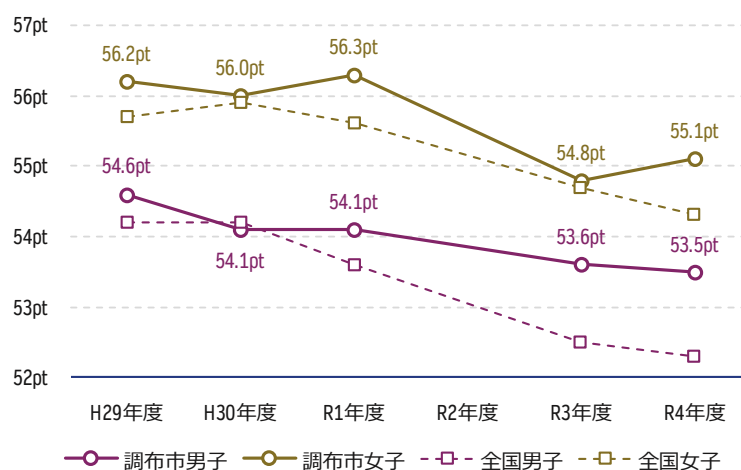


図表 30 運動・スポーツをやったよかったこと(n=2,204)

出典：調布市小・中学生のスポーツ活動調査結果報告書（調布市）

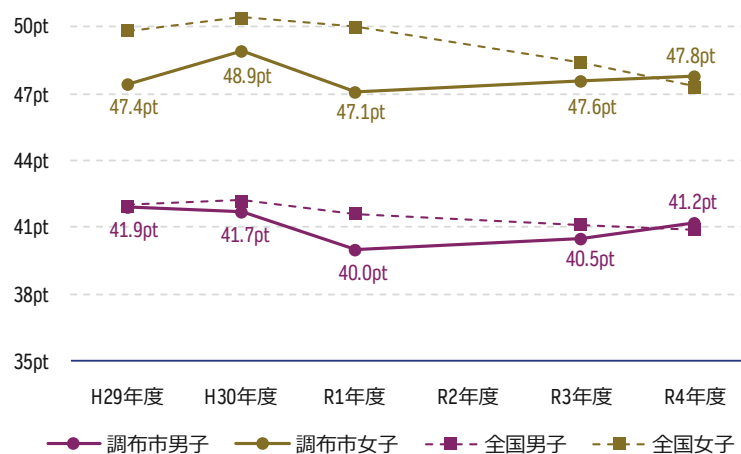


子どもの体力・運動能力について、体力テスト（体力・運動能力・運動習慣等の調査）の合計点をみると、小学生はコロナ禍による減少後、コロナ禍以前の水準には回復できていない傾向にありますが、中学生は男女ともに概ね横ばいに推移しています。また、いずれの属性においても、直近値で全国平均を上回っています。とりわけ中学生は、全国的にコロナ禍の影響を受ける中で微増を続け、令和4（2022）年度には全国平均を上回る形となりました。（国の調査に合わせ、小学校5年生、中学校2年生で比較）



図表 31 小学生体力合計点の推移

出典：体力・運動能力・運動習慣等の調査（東京都）より作成/
全国体力・運動能力，運動習慣等調査（スポーツ庁）より作成



図表 32 中学生体力合計点の推移

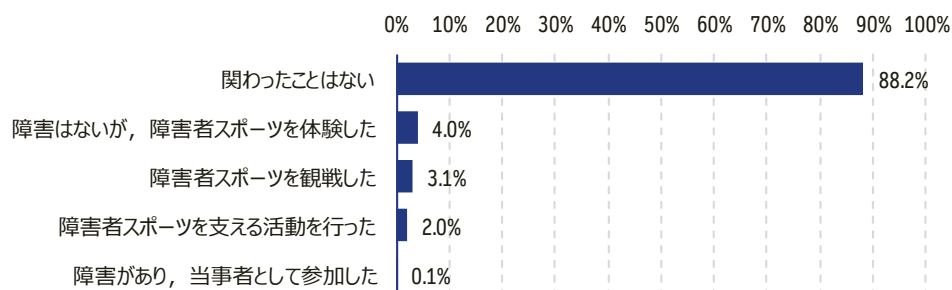
出典：体力・運動能力・運動習慣等の調査（東京都）より作成/
全国体力・運動能力，運動習慣等調査（スポーツ庁）より作成



(5) 障害者スポーツ（パラスポーツ）について

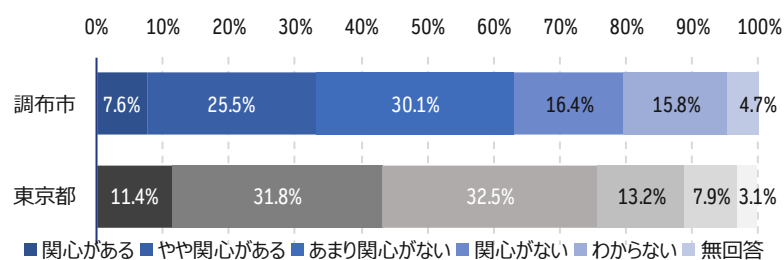
障害者スポーツに関わったことがない人が 88.2%となっています。

障害者スポーツに「関心がある・やや関心がある」人は 33.1%、「あまり関心がない・関心がない」人は 46.5%となっています。



図表 33 障害者スポーツへの関わり(n=1,178)

出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）



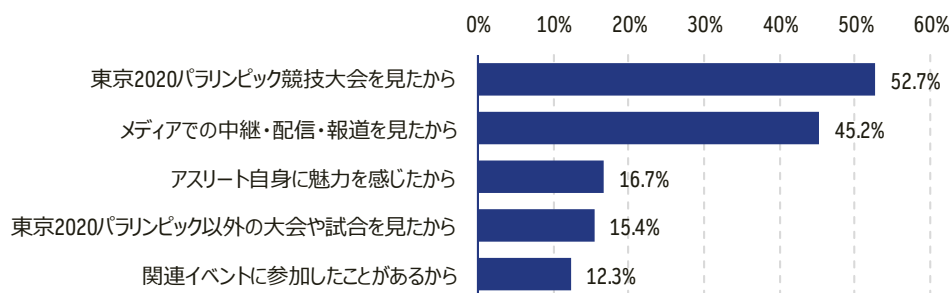
図表 34 障害者スポーツへの関心の有無

出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）/
都民のスポーツ活動に関する実態調査（東京都）



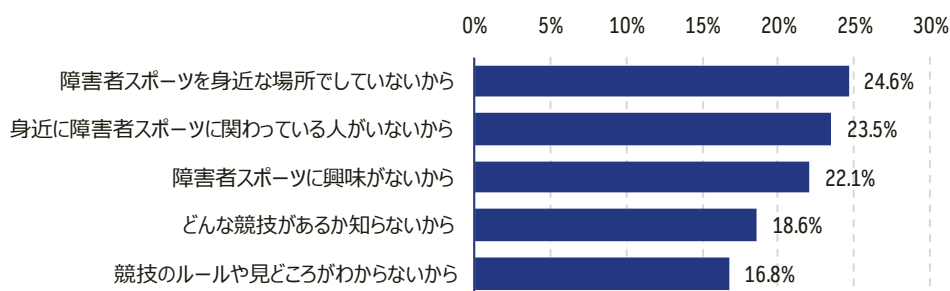
障害者スポーツに関心をもったきっかけは、「東京 2020 パラリンピック競技大会を見たから」が 52.7%、「テレビやインターネットなど、メディアでの中継・配信・報道をみたから」が 45.2%となっています。

障害者スポーツに関心がない理由は、「障害者スポーツを身近な場所でしていないから」が 24.6%、「身近に障害者スポーツに関わっている人がいないから」が 23.5%となっています。



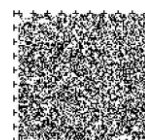
図表 35 障害者スポーツへ関心を持ったきっかけ上位 5 項目(n=389)

出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）



図表 36 障害者スポーツに関心がない理由上位 5 項目(n=548)

出典：調布市民のスポーツ活動に関する実態調査報告書（調布市）



5 計画策定の視点

視点1

世界最大級のスポーツイベントの開催を契機とした スポーツ機運の高まりを生かしたスポーツ振興

ラグビーワールドカップ 2019 では、東京スタジアム（味の素スタジアム）で開会式、開幕戦を含む8試合が行われるとともに、調布駅前広場周辺ではファンゾーンが開催され、国内外から多くの方々が調布市を訪れました。これらのことは、多くの市民の記憶に刻まれ、スポーツに対する関心や期待感が高まり、翌年に予定されていた東京2020大会に向けた機運の醸成につながりました。

東京2020大会は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、史上初の1年延期となり、また緊急事態宣言が発出される中、市内の東京スタジアム（味の素スタジアム）、武蔵野の森総合スポーツプラザをはじめ、多くの会場において無観客開催となるなど、これまでに経験のない困難な状況下での開催となりました。そうした中で、すべてのアスリートが自らの目標に向かって果敢に挑戦する姿は、全市民、とりわけ次代を担う子どもたちに大きな感動、そして夢と希望を与えてくれました。世界最大級のスポーツイベントを通して確認された「スポーツの価値」の重要性や、スポーツ機運の高まりを次代のまちづくりにつなげていく必要があります。

視点2

スポーツを通じた共生社会の充実

東京2020大会を契機とした「パラリンピックレガシー」の創出を目指し、共生社会の重要性を発信する取組として「パラハートちょうふ つなげよう、ひろげよう、共に生きるまち」を市独自のキャッチフレーズとして掲げ、障害者スポーツの振興に向けた取組や、障害理解の促進に向けた取組などを展開しました。こうした取組を、次代のまちづくりに継承し、共生社会の更なる充実に向けて発展させていく必要があります。

視点3

トップスポーツチーム等多様な主体との連携

市は、これまでFC東京とのパートナーシップを育み、市民スポーツの振興をはじめ、まちづくりの様々な分野において、クラブと連携した取組を展開してきました。

また、東京2020大会の車いすバスケットボール競技の市内開催を契機として、日本車いすバスケットボール連盟との連携協定を締結したほか、ラグビーワールドカップ2019 閉幕後においては、東芝ブレイブルーパス東京や東京サントリーサンゴリアス、調布市、府中市、三鷹市による5者連携協定を締結しました。両大会を契機として構築・発展した様々なパートナーシップについては、一過性のものとせず、大会のレガシーとして継承・発展させていく必要があります。

